

「第1回 丹沢大山保全・再生セミナー」 開催報告



青木淳一 丹沢大山総合調査団長

平成16年8月20日(18:30～20:30)に県民活動サポートセンター403号会議室において、「第1回丹沢大山保全・再生セミナー」が開催されました。このセミナーは、総合調査に関する情報の共有と各調査チーム相互の情報交換を目的として、丹沢大山総合調査団が主催したものです。当日は、調査団関係者や丹沢に関心を寄せる県民など73名の参加があり、満員状態での開催となりました。

冒頭の青木淳一丹沢大山総合調査団長(県立生命の星・地球博物館館長)のあいさつに続いて、生きもの再生調査チームのチームサブリーダーの羽澄俊裕氏(株)野生動物保護管理事務所代表取締役)と、調査事務局の永田幸志氏(自然環境保全センター)、水と土再生調査チームの水・土グループリーダーの石川芳治氏(東京農工大学助教授)から、調査の背景や調査計画、および中間報告がありました。

参加者と報告者の間では、報告の内容について熱心な質疑応答が交わされ、最後に木平勇吉調査企画部会長(日本大学教授)による閉会の言葉で第1回セミナーは盛会のうちに終わりました。

各報告の概要は以下の通りです。

(1) 生きもの再生調査チーム

「ツキノワグマからみた丹沢の自然の現状と課題」

(株)野生動物保護管理事務所代表取締役 羽澄俊裕氏
(生きもの再生調査チームサブリーダー、大型哺乳類
調査グループリーダー、外来種調査グループリーダー)



ツキノワグマは、世界的にも日本国内でも、自然保護の象徴として扱われることが多い動物です。それは1頭の行動圏が大きいということと、まわりの自然環境や自然植生と密接な関係をもっているということが理由です。野生のクマが生息する先進国として、日本でも野生動物保全のための管理システムを作る必要があります。

私は過去に、丹沢のツキノワグマの行動圏や遺伝的な状況について断片的に調査してきましたが、丹沢のクマは、富士山や御坂山地など他の地域のクマに比べて、遺伝子の多様性が失われ

ているということと、体のサイズが非常に小さく栄養状態もあまり良好ではないということがはっきり分かっています。

これからの総合調査で、データを蓄積し解析することによって、クマが好む環境はどのように分布していて、どこで途切れているのか、どこに物理的な障壁があるのかということ明らかにし、クマの分布の連続性を生み出すことが一番有効なクマの保全なのではないかと思っています。そして、クマを守るということは、他の生物相の保全にもつながるだろうと考えています。

「保全センターにおけるシカのモニタリング調査」

自然環境保全センター 永田幸志氏

(生きもの再生調査事務局)

前回の総合調査と計画策定前の準備調査で、植生劣化は丹沢山、塔ノ岳、堂平周辺で顕著にみられ、また、その周辺ではシカが高密度化していることが明らかとなりました。現在、保全センターでは、大きく分けて「個体群に関する調査」と「生息環境に関する調査」という2つの調査を行っています。

「個体群に関する調査」では、生息密度や生息動向、捕獲個体の年齢や栄養状態分析、行動圏調査などを行っています。

これまでの結果では、生息密度に大きな変動が見られず、地域的な高密度化が維持されていることがわかりました。また、狩猟圧のかかる地域では、狩猟圧を避けるために行動圏を変化させる個体がいる可能性も示唆されました。

「生息環境に関する調査」では、植生劣化状況、餌植物分布、植生保護柵による植生回復状況などの調査を行っています。植生の劣化は前回調査時より進行し、シカが好まない植物の分布域が拡大していること、植生保護柵を設置して数年が経過した場所では植生の回復が見られ始めているということなどがわかりました。



会場の様子

(2) 水と土再生調査チーム



「丹沢堂平地区における山腹土壌浸食量調査」
東京農工大学助教授 石川芳治氏
(水・土グループリーダー)

堂平地区のブナ林は、林床植生の衰退によって土壌浸食が起こっているのではないかと考えられています。当調査の目的は、どのようにして浸食が起こっているのか、そしてその浸食量や降雨時の地表を流れる水の量はどれほどか、さらにこれらは林床の植生の被度とどのように関連しているかということを検証することで、丹沢でこのような数値が明らかになるのはこれが初めてです。

調査の方法としては、面積 10m² の浸食面を有する試験斜面を枠で囲い、斜面下部に浸食された土壌と表面流を捕捉する装置を設置します。これを、植生の被度や斜面長、斜面勾配といった視点からそれぞれ対象区を設定し、計 9 箇所の試験斜面を設定しました。

試験斜面の設置は、平成 16 年 6 月から開始し、7 月 4 日から 8 月 9 日までの間に浸食土砂量を 4 回測定することができました。その結果、植生の被度が少ないほど浸食量が多くなること、表面流出量 × 10 分間雨量と土壌浸食量がほぼ比例すること、土壌浸食量と落葉・落枝の流出量がほぼ比例することがわかりました。さらに、林床植生が少ない場合、1 ヶ月に平均 1 ~ 2mm の土壌が浸食されるということが推定されました。

土壌浸食量の増大は、水源涵養機能の低下をはじめとして丹沢の自然環境に様々な影響を及ぼします。今後も調査を継続し、最終的には得られたデータをもとに土壌浸食量予測手法と併せて現地での浸食防止の対応策を検討していきます。



木平勇吉 調査企画部会長

第2回以降も、毎月第3金曜日を開催していきます。

第2回は、9月17日(金)(18:30~20:30)に、県民活動サポートセンター3F305号会議室において、地域再生調査チームと情報整備調査チームからの発表を予定しています。